

仏教文化公開講座講演録

龍樹菩薩に学ぶ

—空性論の展開から浄土教の導きへ—

佐々木恵精

皆さま、こんにちは。佐々木恵精と申します。こちらの礼拝堂にうかがうのも久しぶりだなあと、懐かしく思いながら参上しました。今日は、「龍樹菩薩に学ぶ」というテーマで、これまで学ばせていただいた龍樹菩薩について、その「空性論」から浄土教に至る歩みなどをお話しさせていただければ、と思っております。

はじめに

はじめに、仏教を学ぶようになったことについてひとこと申し上げておきたい思います。大学に入学するころは理系（物理など）が好きだったこともあって、初め工学部に進みました、三年間でしたが会社勤めもしました、その中で、（技術的なことだけを生涯の仕事にしているのか、生きていることそのものを見つめることが大事で

は)との思いから文学部に学士入学して仏教を学ぶこととしました。少し歳としいってからの勉強となり、なかなか大変でしたが、なんとか卒業して、また素晴らしい先生がたのお蔭で、大学で仏教学を担当させていただくことになり、これも右往左往しながらでしたが、なんとか、三十数年務めさせていただきました。

龍樹菩薩について学び、研究することとなったのも、先生がたから、「龍樹菩薩は、大乘仏教の根本でもあり、弟子のアーリアデーヴァの論書は、まだあまり研究されていない、このあたりについて取り組む意味は大きく、仏教思想としても重要であり面白いと思う」というご助言をいただき、龍樹菩薩とその弟子のアーリアデーヴァ——中国・日本では聖提婆しょうたいぼと呼んでいます——これらの初期大乘仏教の偉大な論師について取り組むことになりました。大乘仏教の根幹となる論師たちについて学ぶ、そしてそれらの論書を読む、ということは、とても大変なことでしたが、たどたどしい歩みで四十年余りになります。大したことはできていないのですが、今日は、この龍樹菩薩について、いくらかでも紹介させていただこうと思います。

一、「七祖」の第一祖・龍樹菩薩

龍樹菩薩は、日本では全仏教の祖師という意味で「八宗の祖」と言われますが、私たち、親鸞聖人のみ教えをいただいているものとして、親鸞聖人はどのように受けとめておられるのでしょうか、まずこの点をうかがうことにしましょう。それは、皆さんよくご存じのことでしょうが、聖人は浄土真宗を説き示された祖師として、直接の師匠である法然聖人のほか、インド以来の六師を挙げられて、七高僧あるいは七祖と呼ばれます。その第一に、龍樹菩薩（あるいは龍樹大士と呼ばれます）が挙げられます。「浄土真宗の祖師」とされるについては、①自ら阿弥陀仏の浄土に生

まれたいと願う「浄土願生者」であること、②著作を著して他力の教えを示していること、③説いていることが阿弥陀仏の本願のはたらきになつてゐること、④独自の教義展開を發揮していること、という四つの意義を持つことによつて「祖師」とされるといわれています。龍樹菩薩もその第一の祖師とされていますが、しかし、インドに初期大乘仏教が現れ始める紀元一、二世紀ころの仏典を拝読して研究しているところでは、龍樹は「空性論」の確立者であり、龍樹の「空性論」の展開に注目して、いいて、「浄土願生者」などという姿が見えてきません。そこで、インドの初期大乘仏教を学んでいく中で、「浄土願生者」と「空性論者」とがどのように繋がらうのか、が大きな課題でした、また現在でもそのようなところに問題意識を持つておられる方が多いと思われまふ。今日は、そのような課題や疑問をいくらかでも解きほぐすことができれば、と願つております。

二、龍樹菩薩の主要論書と思想

そこで、まず大乘仏教の第一の祖師とされる龍樹菩薩の主要な論書は、というと、先ほど申しましたように、大乘仏教の思想の根幹をなす「空性」の論を大成され、その論理の展開を確立された論師ということで、「空性論」を展開されている著述が多く、また重視されます。お手許の資料の中の〔図解1〕に龍樹真撰と見られる論書を挙げました——ローマ字表記を付記しているのはサンスクリット本があるか、チベット大蔵経にサンスクリット名が挙げられている、そのサンスクリット名です——、その中で(1)に挙げるのが「空性論」を論ずる主要著述で——(2)については後ほど触れます——、中でも『中論頌』(漢訳に「中論」とありますが偈頌からなるのでこのようにも呼ばれます)がその代表と言えるでしょう。この『中論頌』の中味を少しばかり拝見して、まずは龍樹菩薩の「空

性論」の展開をうかがうことにしましょう。

この『中論頌』とは、サンスクリット本が *Madhyamakakārika* (マドウヒヤマカ・カーリカー) という題名で、「中

〔図解1〕

龍樹の論書

(1) 空性論の論理的な論証の論書――

『中論頌』 (*Madhyamakakārika*)¹ 『六十如理論』 (*Yuktisāhika*)²

『空七十論』 (*Sūnyatāsaptati*)³ 『廻諍論』 (*Vigrahavyāvartanī*)⁴

『ヴァイダルヤ論』 (*Vaidalyaprakaraṇa*)⁵

(2) 菩薩道のあり方、王道のあるべき姿などを説く詩頌・論書――

『宝行王正論』 (*Ratnavali*)⁶ 『勸誡王頌』 (*Suhrillekha*)⁷

『四讚歌』 (*Caturstava*)⁸ 『大乘破有論』 (*Bhavaśaikṛānti*)⁹

『菩提資糧論』¹⁰ 『因縁心論』 (*Pratītyasamutpādhārdaya*)¹¹

『大智度論』 (偈頌は龍樹造と見られるが、長行〔解説文〕は鳩摩羅什著か?)¹²

『十住毘婆沙論』 (漢訳のみ。偈文は、龍樹真撰と見られる。鳩摩羅什がインド僧・仏陀耶舍

(*Buddhayaśas*) の口誦によって訳出したが意見の相違などがあった途中等での訳出となったと言われる)

〔道〕についての詩頌（偈頌）」という意味です、実際、四四八詩頌（漢訳は四四五詩頌）からなる詩頌のみの論書で、これに注釈（各詩頌の解説）がつけられるというものです。

その冒頭に、「佛に帰依して本書を著します」という趣旨の詩頌―「帰敬偈」といいます―が詠われます。その文は、

〔何ものも〕滅することなく生ずることなく、断滅でなく常住でなく、同一でなく別異でなく、来ることなく去ることのない、戲論（想定された多様の議論、言語的多様性）が寂滅していて吉祥なる（めでたい）、そのような縁起を説かれた正覚者（ブツダ）に、諸説法者の中の最勝の人として、私は敬礼します。

と詠っています。これでお分かりのように、「帰敬偈」というのは、その論書で何を論ずるか、論の主題、論ずるかなめを披歴して佛陀に敬礼する、という詩頌になっています。大事の論書には、したがって、このような帰敬偈を冒頭に詠い、何を論ずるかを仏前に披歴されていることになります。『中論頌』にも、このように帰敬偈によって龍樹菩薩が論じようとする主たる論旨を披歴されているのです。その漢訳には、

不生亦不滅 不常亦不断 不一亦不異 不来亦不出（↓注）

能説是因縁 善滅諸戲論 我稽首礼仏 諸説中第一

〔注〕「不出」は、「不去」と訳されることが多いが、本論は「不出」とあります

（不生にして亦た不滅、不常にして亦た不断、不一にして亦た不異、不来にして亦た不出なる、

能く是の因縁を説き 善く諸の戲論を滅したまふ、我れは稽首して仏に礼す、諸説中第一なりと）

とありますように、この帰敬偈は、「生ずることなく滅することなく」などと、否定に否定を重ねて「そのような、戲論（言語的な多様性）が消え去った（縁起）を説かれたブツダを最上のお方として敬います」と詠われているの

です。ここに八つの否定をされ、そしてこの論書が『中論』と言われるように偏見を離れた中庸の道「中道」を説かれるので、龍樹菩薩の説かれるところが一般に「八不中道」と呼ばれ、まさに「縁起」とは「八不中道」であると説かれた論師といえるでしょう。もう少しその内容を詳しくうかがっていきましょう。

まず、「縁起」とはどのようなことでしょうか。二千五百年前にお釈迦様がお悟りを開かれた、そのかなめが、「縁起の理法」であるといわれます。お釈迦さまは釈迦族の王子として生まれ、幼少のときから、人や動物たちが生まれて来て死んで行く、病に苦しみ死んで行くという姿を、わがこととして見つめられ、生きていることを深く見つめ反省されました。「どうして生き物は苦しむのか、どうして死んでゆくのか、それなのに平気な顔をして目先の楽しみに興じている、それでよいのか……」などと思いつまれました。そして、その解決のために住まいの城を出て「出家」し、この「私」を、釈尊ご自身をまともに見つめられ、また生き物や自然をまともに見つめる「修行」（深い瞑想）をされて、真実に目覚め大悟された、そのかなめが「縁起の法」の目覚めであり、すべてを、釈尊ご自身をも含めて「縁起している」と見つめられたのでした。どのようなことか、と言いますと、「あらゆるものは、原因があらゆるものの条件（「縁」といいます）があつてこそ生まれ、存在している」という真実の姿を見つめられた、言い換えますと、人は一般に、自分の本性というか「この私」の根底に変わらない根本の存在がある（それを自我と言ひ、あるいは魂とも言われるでしょう）と思ひ込みがちですが、「すべては原因や縁（諸条件）によつて生まれているものなので、そこにはその存在の独自のゆるぎない本性ほんしやうとか自性じしやうとか魂とか言えるものはない」ということになり、また、古くから「縁起」を説いて「此れ有れば彼れ有り、此れなければ彼れなし、此れ生ずれば彼れ生じ、此れ滅すれば彼れ滅す」と言われるように、すべては必ずほかに原因や縁があつてそれらによつ

て生じており、あるいはほかのものとの関係の中でこそ存在しているのであって、それ独自の存在、自我とか本性というものはあり得ない」と説いているのです。最近では、これを「相互依存性」とか「相依性」などともいわれ、英語でも「Interdependency」などという新訳語が用いられつつあります。

そして、我々は「ここに我あり」とし、ものが有ると捉えますが、龍樹菩薩は、お釈迦様以来説かれてきた、この「縁起せるもの」を、「生ずることもなく滅することもない」などと、否定に否定を重ねて示されたのです。これを、さらに「空」とか「空性」で示されます。この「空」とは、サンスクリットでは śūnya（シューニア）といい、本来「欠落している」という意味です。例えば、床の間のある部屋（最近では、そのような部屋がない家屋が多いかもしれませんが……）、そのようなところには、必ず、床の間の中央に掛け軸があり、左手に花器が置かれてお花が活けられている、そのような部屋が床の間のある部屋と言えますが、何かの都合でお花が活けられていないとすると、床の間のある部屋として、欠けている感じがします。そのように、あるべきものがない、あるはずのものがない、というときに、「空」(śūnya)と言われるのです。——したがって、「空」とは、まったく何も無い、虚無の状態をいうのではなくて、龍樹菩薩が言われる「縁起しているものは空である」というのも、「生ずる」などの現象を全く否定しているのではなく、我々が固定的に捉えがちな「本性として生ずる」ことなどを否定しているということになります。そこで、この『中論頌』やその註釈では「自性として生ずることなし」などと、「自性として」を加えて論述され示されています。龍樹菩薩は、このようにして私どもが「ここに我あり」とか「ここに物がある」とかいう、我々の捉え方をすべて否定する、「本性としてはあり得ない」というようにして否定する、論理を駆使して否定する方法で否定の論理を展開されました。自らは主張命題を全く立てず、ひたすら相手の主張を否定するというやり方でした。

さらに、『中論頌』の第二十四章第十八詩頌には、「縁起即空」の意味が明確に示されています。すなわち、漢訳では、

衆因縁生起 我説即是無 亦為是假名 亦是中道義
（この「無」は「空」の別訳です）
とあり、現代語訳しますと、

縁起せるところのもの、それが空であると我々は名づける。それが何ものかを因として概念設定すること（仮）でもあり、またそれが中道でもある。

となるでしょう。これは後に、中国の天台大師（智顛）が「三諦偈」と呼んで、「三諦円融」なる智見を示すものとして重視されました。すなわち、ここには、お釈迦さまが、「すべては縁起せるものなり」と説かれた、それは、「固定的に生ずるものでもなく滅するものでもない」、「実体なき、空なるものである」、しかし、それは縁起するものとして、その時々々の条件によって仮に設定されて有る「仮名」と言えるものであり、完全な有でも完全な無でもない「中道なるもの」である、として、空・仮・中の三つの真実（三諦）が円かに融け合っている、として「三諦円融」とされました。

龍樹菩薩は、「空性論」を示されて徹底した否定の論理を展開されましたが、それは、我々の自己執着、固定的な思考を打破するためだったといえるでしょう。実際、龍樹菩薩は、自らは主張命題を持たずもっぱら相手の主張を否定し排斥されたのですが、それは真実の目覚めを究めようとしたものとうかがわれます。このようにして、天台大師も、龍樹菩薩を天台教義のかなめを示された祖師とされているのです。

三、浄土教に関わつての龍樹菩薩の歩み

さてそこで、龍樹菩薩には否定に徹する「空性論」を論ずる論書とはちがつた面を窺うことができる著述も少なからず著されています。先ほどの「図解1」の中で(2)に挙げた論書は、まさに「空性論」を直接論ずるのではない、菩薩道の姿に出遇うことができる、注目すべき龍樹菩薩の論書です。これらによって、菩薩道を歩まれる龍樹大士の姿を窺うことができるのです。

その中で、まず『宝行王正論』です。最近、と言っても、一九〇〇年代前半に、このサンスクリット原典が発見され、出版されました。そのタイトルは『ラージャパリカター・ラトナーヴァリー』(Rajaparikatha-Ramavali) すなわち「王への教訓・一連の宝珠」という題名で、一般には「ラトナーヴァリー」と通称されています。これは、詩頌をもって書簡とし、南インドのサータヴァーハナ王朝のある王に宛てて「王としてあるべき道」を示したものとされます。全体で五章、五〇〇余の詩頌からなります。また、次の『勸誡王頌』はサンスクリットのタイトルが「スフリッレーカ (Sufrikha)」「友への書簡」という意味です)で、これもサータヴァーハナ王朝の王に宛てた書簡で、一二九詩頌からなっています。これらには、龍樹菩薩の友である、ある王に対して、人としての道、王としての道を説く「王道」が詠われているのです。そこにまさに「菩薩の道」を歩む龍樹菩薩の姿がうかがえるのです。

菩薩というのは何か、と言いますと、お釈迦様当時は、お釈迦様の教えを聴聞して、出家し瞑想などの修行に専念する修行僧——テーラワダー(上座部)——と言われる——が中心でしたが、それから数百年して紀元前後頃になると、「自分の解脱のみを求めるのでなく、あらゆる生きとし生けるものがともに解脱への道を歩むことにならねば、

本當の仏道とはいえない、あらゆるものが歩み得る、救われる道を完成しよう」という——これが大乘と言われる——歩み方が出てきて、そのような道を究めようとする仏教求道者が現れ、みずから「菩薩」と呼ぶようになります。龍樹菩薩もまた、このような菩薩の道を極められて、「縁起すなわち空性」という真理に到達された、そしてあらゆるもの（一切衆生）が歩み得る道「仏道」を歩まれていたとうかがうことができるのです。

『宝行王正論』（ラトナーヴァリー）には、王道としてこの世での人の道を説きつつ、菩薩の道、菩薩のころを説かれています。その一端が、菩薩の誓願を説く詩頌から窺われます。例えば、第五章の第六五詩頌以下に、

そこで、仏像や仏塔の前であれ、ほかの処であれ、次の二十偈頌を毎日三度と誦よえてください。（六五）

仏、法、僧と菩薩とに恭敬をなし、帰依して、それら供養するにふさわしい人々に、私は礼拝をささげます。（六六）……

人びとが、私を見、心に思い、またただ（私の、仏の）名のみを聞いて淨信を起し、乱れることなく、心安らかとなり、かならず完全無欠の菩提に到るものとなりますように。（八〇）……

などと詠われています。この第八〇詩頌は、私たち、浄土真宗徒にとつて大事な『大無量寿経』の「第十八願文」と同じころを詠っていると窺われるでしょう。すなわち、『大無量寿経』では、法蔵菩薩が一大誓願を立て菩薩の行を成し遂げて阿弥陀仏と成られた、その誓願に、「（私が正覚を得た時には）私の名を聞いて信賴を寄せた者が必ず私の国（阿弥陀仏の浄土）に生まれることになるであろう、そうならなければ私は正覚をとらない」（要旨）という決意を誓われて菩薩道を実践された、と示されています。『宝行王正論』も、同じ菩薩のころを示すものと窺われます。そこには、「縁起するものは空である」という真理に目覚めた智慧をもって、あらゆる生きとし生

けるものが同じ道を歩む同朋であり、この真理に目覚める道をとにもする、というところが示されているといえるでしょう。まさに、他力（すなわち正覚を得られた仏のはたらき）に導かれる道、ほかの同朋とともに歩むという利他行の姿がここに示されているのです。

さらに、「図解Ⅰ」の最後に挙げた『十住毘婆沙論』が龍樹菩薩の著とされ、その第九章「易行品」が浄土教にとつて大事なものとされます。本論は、菩薩の実践道である十地（ここでは、十住と訳されています）の要点を、他の大乘經典に依りながら解説するもので、専門の先生がたは、龍樹真撰ではないだろうと言われていますがしかし、本論を詳しく研究する先生がたは、その中の詩頌部分は龍樹真撰であろう、とされています。親鸞聖人が「七高僧」の第三に挙げられる中国の曇鸞大師は、『浄土論』（今回はその内容にまで触れられませんが……）を解説されるにあたって、最初にこの「易行品」を要約して引用しそれに基づいて解説されているのですが、「易行品」の冒頭に、次のような趣旨のことが説かれていることを示されます。

二度と退くことのない状態（阿惟越致地、あるいは不退と言われます）にある菩薩といわれるが、その位に至るには大変な難行を行じてこそ得られると説かれる、がしかし、（普通の我々でも歩まれる）やさしい道（易行道）はないか、出来ればそれを説いていただきたい、との問いに、そのような弱弱しいことではないかん、身命を惜しまず、精進しなくてはならぬ。とはいっても、資質的に菩薩道を修行できない者は、例えば自らの足を歩む陸道は苦しいが、船に乗せてもらって進む水道は楽しいように、自ら歩む勤行精進のものがあり、また信心を方便とする「易行」の道で速やかに二度と退くことのない状態（阿惟越致地）に至るものがある。……（要旨）

このように、正覚を得る資質なき凡夫は「信方便」すなわち、仏のはたらきに乗せていただく（それが、信方便

であり、仏の名を称することによって導かれることを意味します。こと、それが仏道となることが、ここに示されています。「乗船」の譬喩は、凡夫でも歩ませていただける大乘の道、仏の智慧と慈悲によって導かれる道を示す最高の譬喩だと思います。ここには、「この船は大丈夫かしら」という疑いがあつて、自分で泳ぐ、と自力を出しては「ダメ」となります、船に乗せてもらつて、本当に任せきるところになつてこそ、正覚へと導かれる、「二度と戻らない」状態、すなわち「阿惟越致地」「不退」に至ることになると示されているのです。親鸞聖人は、この「易行品」あるいはその関連する処を引かれて、「現生正定聚」すなわち「現在世において〔正覚を得ることに〕正しく定まつている輩」という状態になることを示しておられるのです。

龍樹菩薩は、菩薩道を極められて、大乘仏教の根本を、「縁起せるものは空性なり」という真理のもとに置き、その上に立つて、真実の智慧と慈悲のはたらきとして同じ同朋であるあらゆる生きとし生けるものの道「信方便の易行」を示された祖師であり、親鸞聖人は「七高僧」の第一に挙げられているのです。

不十分な説明に終わつてしまい、申し訳ありませんが、龍樹菩薩のところに耳を傾けていただくことをお願いして、私の話を終了とさせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

〈キーワード〉

龍樹菩薩 空性論 菩薩道 易行道